

# 発話の重なりについて

—分類の試み—

藤井 桂子

## 要 旨

会話の中で生ずる参加者同士の発話の重なりは、Sacks et. al. (1974)らが論じた「一人ずつ話す」という原則に照らして、誤りや妨害といった否定的な解釈をされることが少なくない。しかし、この原則がどの言語にも当てはまるとは限らず、また、同じ言語の中でも、重なりの機能が一つであるとは限らない。重なりの「機能」や「用いられ方」を明らかにし、また、「他言語との比較」をする上でも、重なりの分類枠を設けることが必要となる。本稿では、「発話権の維持」と「トピックの一致」の2つを分類の基準にし、重なりを調和系、調整系、独立系の3つに大別した。日本語の日常の会話（友人同士の雑談）に生じる重なりがどのように分類できるかを試みた結果、日本語では妨害的な性格の独立系の出現はごく少ないことなどを明らかにすることができた。

[キーワード] 重なりの分類、発話権維持、トピックの一致、協力、妨害

## 1. はじめに

日常の会話を文字に起こしてみると、シナリオなどに見られる「一人ずつ交替で話す会話」とは違って、参加者同士の発話の一部や全体が同時に現れる、発話の「重なり」が生じていることがわかる。こうした発話の重なりは、会話の先駆的研究であるSacks et. al. (1974)らが論じた「一人ずつ話す」という原則に照らして、「誤り」(Sacks et. al. 1974)、「妨害」(Levinson 1983)、あるいは「権利の侵害」(Zimmerman & West 1975、山崎他 1984)として否定的に解釈される場合が少なくない。しかし、重なりがすべて、否定的なものであるとは限らない。Goldberg(1989)、Makri(1994)は、重なりには、支援機能もあることを指摘し、重なりの一律的な否定的解釈に対する疑問を投げ掛けている。また「一人ずつ話す」という原則が、どの言語にも共通するものであるとはいえない。Makri(1994)によると、インド英語(Reisman 1974)、タイ語(Moermane 1987)、プエルトリコ語(Kilpatrick 1990)などについて「一人ずつ話す」という概念が当てはまらないことが報告されている。このことは、重なりの機能が文化によっても異なってくることを示唆している。日本語については、重なり

が高い頻度で生じていること、また、「妨害」ではなく、先行する発話に協力的な重なりが多く生じていることが指摘されている（藤井・大塚1994）。

本稿では、藤井・大塚(1994)で取り上げている「協力的な重なり」以外の重なりにも目を向け、日本語の会話に生じている重なり全体を見るために、重なりの分類を試みたいと思う。重なりの分類の枠組みを設けることで、これまで、重なりの機能を区別せずに比較されていた重なりの男女差の影響(Zimmerman & West 1975、山崎他 1984)を始め、場面や対人関係の影響、会話のタイプの影響などを、的確に比較することが可能になり、どのような場合に、どんな種類の重なりが出現し、どのような役割を果たしているのかを明らかにしていくことができると思う。また、日本語学習者の会話と比較することで、学習者が会話に参加する上での問題点の一端を明らかにし、日本語教育への応用を探ることや、さらには、他文化の言語との比較も可能になってくるものと思われる。本稿では、初めに、重なりを、重なりが生ずるタイミングから、分類する。次に、この中で、「意図的」とされるタイプの重なりについて、機能を分類するための枠組みを設定し、日本語では、どんな重なりが枠組みに当てはまるかを見ていく。最後に分類によって明らかになった事柄について考察する。

## 2. データ

日本人3～4人による日常の会話16組、57人分、総時間数約 100分の文字化資料、録音テープ、録画テープから収集した787 例の重なり（データについての詳細は別紙）を分析の対象とした。ただし、この重なりには、「ふーん」「うん」などの単に聞いていることを示す短いあいづちとの重なりは含まれていない。

## 3. 分類I -重なりのタイミング、位置からの分類-

次の4つの例は、会話のやり取りで、一つの発話に対し、次の発話が、どんなタイミングで起こり得るかをタイプ分けしたものである。

例1) A: レポート書いた? [ :発話の重なりの開始箇所  
B: まだ書いてない

例2) A: レポート書い [た?  
B: [まだ書いてない

例3) A: レポート [書いた? 例3') A: レポート [  
B: [まだ書いてない B: [まだ書いてない

- 例4) A: レポート書いた?  
B: [まだ書いてない  
C: [書いてないよー

まず、例1)では、Aの発話終了後に、Bの発話が開始され、発話の重なりは見られない。これに対し、発話の重なりが見られるのが、例2)～例4)である。例2)では、Aの発話の末尾で、Bの発話が開始され、重なりがわずかに生じている。一方、例3)では、Aの発話の途中からBの発話が開始されAの後半部分とBの前半部分に重なりが生じている。また、例3')のように実質的な音の重なりがない場合でも、Aの発話が明らかに発話途中であると見られる場合は、重なりとして考える。例4)は、Aの発話終了後に、BとCが同時に発話を開始し、BC間に重なりが生じた場合である。本稿では例2)～4)に見られるような、「会話参加者の発話の一部または全体が他の参加者の発話の一部または全体と同時に現れること」を「重なり」と定義する。また、ここでいう、「発話」とは「一人の参加者の意味を持ったひとまとまりの音声の連続で、他の参加者の発話(あいづちを除く)やポーズによって区切られるもの」と定義する<sup>#1</sup>。例2)のような重なりを「終了見なし型」、例3)を「割り込み型」、例4)を「同時開始型<sup>#2</sup>」と呼ぶことにしたい。

先に述べたように、Sacks et. al. (1974)では、「一人ずつ話す」こと、即ち、例1)のような重なりのないやり取りを、会話の原則としている。しかし、この原則の中で許容されている重なりが2種類ある。一つが、終了見なし型に相当する重なりで、もう一つは、同時開始型に相当するものである。これらが認められるのは、この2つが、話者交替を司るルールに付随して起こる「偶発的なもの」と考えられているためである。これに対し「割り込み型」は、重なることが承知で行われる「意図的な重なり」であることになる。この3つのタイプ分けは、重なりのタイミングから分類したものであるが、意図性を区別していることにもなる。意図的か偶発的かの区別は、重なりを否定的に解釈する場合に、妨害の意図がないものを排除する点で必要である。重なりを否定的に解釈している先行研究(Zimmerman & West 1975、山崎他1984)でも、この区別だけは行われている。しかし、重なりが肯定的に解釈されるような場合(Tannen 1984)には、間を置かずに即座に相手の発話に反応することに価値が見出だされており、この点で「終了見なし型」と「割り込み型」との区別は重要ではないが、「同時開始型」との区別は必要である。したがって、重なりを分析して

いく上で、まず、この3つの型の重なりがあることを念頭に置く必要がある。本稿では、次に、この中で、意図性が確実にあると考えられる「割り込み型」の重なりについて、その機能を探っていくために、分類を試みていきたい。

#### 4 分類II ー重なりの機能を見るための分類ー

##### 4-1 分類の根拠と目的

「割り込みタイプ」の重なりは、協力であれ、妨害であれ、なんらかの相互作用上の機能を果たしていると考えられる。例えば次の例の重なりの作用を考える時、まず注目しなければならないのは、重ねた発話の内容(トピック)である。ここでは、Bの発話は、Aの発話のトピックと同じで、Aの発話目的の達成にも沿うものであることがわかる。次にAの発話の流れを見ると、重なりのあとBの発話を受け入れ、すぐに自分の発話を続けており、Aの発話権が維持されていると考えられる。これらの2つの観点から、Bが起こした重なりはAの発話に協力していると判断できる。

例 5) テレビゲームの種類について

→ :注目すべき

A: …それからなんだっけC, CDなん [とか

→B: [メガCD

A: メガCDっていうのか なんか3つぐらいあるじゃないなんか…

重なりが協力なのか妨害なのかは、他に音声や、言い方などの要素が影響するにしても、内容的な一致が見られるか、相手の発話権を脅かしていないかが重要な観点になると考えられる。以下、この2つについて述べ、これらを軸に、重なりを分類していくこととする。

##### 4-1-1 トピックの一致について

ここでいうトピックとは、先行発話が提示している発話の内容を指す。内容には命題そのものと、それを伝える話者の目的に応じた、方向性(命題に対する話者の態度)やゴールあるいは焦点などが備わっていると考えられる。話者にとって、同じトピックが同じように他の参加者に取り上げられるかどうかは、自分のトピックが、受け入れられているかどうかを見る上で意味を持つ。Goldberg(1990)は、トピックが一致しているかどうかは、自分が取り上げたトピックが他の人にとっても、おもしろい、あるいは有益であると感じて欲しいという欲求(positive want)を満足させられるかどうかの問題となるとしている。したがって、トピックが一致しているかどうかを見ることは、先行発話と重ねた発話が協力関係にあるか、そうでないかの一つの基準にすることができる。

ここでは、先行発話とのトピックの一致を見るため、次の2段階を設ける。1. 一致している（扱うトピックが同じで、かつ方向性なども一致する場合）、2. 方向性などが異なる、または、一致しない（扱うトピックは同じだが方向性などが異なる場合と、扱うトピック自体が異なる場合）の2つである。

#### 4-1-2 発話権の維持について

Sacks et. al. (1974) の「一人ずつ話す」という原則を根拠に、重なりを否定的に解釈している Zimmerman & West (1975)、山崎 (1984) では、会話におけるやり取りの単位である、「ターン」を、そのまま「発話権」と見なしている。したがって、一人の話者の発話途中に起こる他の話者の発話はすべて、初めの話者の発話権を脅かすものであると解釈され、「妨害」「権利の侵害」といった否定的解釈に結び付くことになる。例えば、先の例5)の重なりも妨害として解釈されることになる。しかし、例5)のような重なりを妨害とするのは妥当であるとは言えない。Edelsky (1981) が主張するように、発話権は、認識に関わるもので、必ずしもターンと一致するものではないと、とらえ直す必要がある。その上で、重なりが発話権を脅かしているのか、いないのかを判断しなければ、重なりを正確に分析することにはならないと考えられる。ここでは、発話権を「発話を続け、発話目的を達成する権利」として定義する。発話権の維持は必ずしも発話を実質的にとぎれなく続けることを意味するものではない。発話を続け、その目的を達成する状態にあると認識できるかどうかの問題となる。したがって、発話の途中で他の参加者の発話が入っても、それが直ぐに発話権の脅かしになるとは限らず、初めの話し手がそれをどう受け取めるか（どう反応するか）を見ることで、判断していきたいと思う。このような観点に立ち、重なりとの関係で発話権をとらえた場合、次のような状態の時、発話権は維持されたと判断できると考える。

1. 重なりが生じても先行発話が中断されず、終了と見なせる箇所まで継続される場合。但し、重ねた話者に発話権が移動したと考えられる場合を除く。
2. 重なりによって、発話に中断が生じるが直ぐに発話が再開される場合。
3. 重なりによって、発話に中断が生じるが、発話の目的が達成された場合。ただし、先行話者が重なりの受け入れでなく、不快感などを示す場合は、先行話者の発話権が脅かされていると考える。本稿では、重なりは発話権の維持を脅かすものであるという「一通りの判断基準」に対して、重なりには、1. 先行話者の発話権が維持される場合と 2. 重ねた話者に発話権が移動する場合

の「二通りの判断基準」を設定したいと思う。

#### 4-2 分類の枠組み

ここで、発話権を縦軸にとり、トピックを横軸にとり、下の図のように重なり  
の分類枠を設定し、以下で、この枠組みにどんな重なりが入るかを見ていく。

図1 先行発話と重ねた発話の関係

発話権 \ トピック	一致	方向などが異なる	一致しない
先行話者の発話権維持	① (調和系)	② (調整系)	
先行話者の発話権移動	③ (独立系)		

##### 4-2-1 調和系

①の部分の重なりは、重ねた発話が先行発話のトピックと一致し、また先行話者の発話権も維持されていると判断できる場合である。先行発話に調和しているという意味で「調和系」と呼ぶ。まず、具体的な例をあげたい。

例 6) 夫婦喧嘩について {同意、共感}

N: …ばーっといっちゃえば [それですっきりするのにさー]  
 →M: [いっちゃえばそれですっきりするのにさー]  
 N: そうなのよ

例 7) 留守の時、子供の面倒をだれが見るかについて {感心}

A: もしかすると母がだからそのためにマン  
 ションをかりてね [うちのチビたちを]  
 →B: [ウワすごくいい話じゃない]  
 A:ほんとに、だからそんなね…

例 8) テレビゲームについて {応答}

A: ハ ハドソンってなに、な [ん なん]  
 →C: [ソフト会社ですねソフト会社]  
 A: あれは何系統?

ここに分類した重なりでは、それぞれ {} 内に示したような「同意・共感」「驚き・感心など」「誉めなど」、質問への「応答」、また例5で見た、「理解・承認」などを表す発話が重なっている。これらが図の③の部分に分類される可能性がないわけではない。しかし、ほとんどが、先行発話に素早く反応するだけに止まり、先行話者もこれを受け入れる反応を示している。③に分類された重なりは、次の例のようにトピックが一致していても、「だから」などの語を用いて、優位性や主体性を主張していたり、説明が長く続いたりするよう

な場合である。また、先行話者の自尊心を脅かすような言い方の発話も③へ分類する。なお、同意などの後、トピックの展開をはかるものは、③へ分類した。

例9) 「規制緩和」のレポートの項目を分けるべきかについて {総括}

C: 分けちゃってるのも [いる  
→B: [だから、あれは別にいいんじゃない、最後にだから規制緩和の意義のどうのこうのって書いてー(きえびがけいい) 嘘

調和系の重なりの特徴として、指摘できるのは、トピックだけでなく、音声の上でも、「そうそうそうそう」や「あるあるあるある」など音を重ねてリズムを合わせたり、エコーのように先行発話を追いかけたり(例6)、また、素早く発話されるといった先行発話との調和が見られる点である。また、形の上でも、簡略形や短いことばが用いられる傾向に加え、相手に認知されやすい特定のパターン(相手の発話の「先取り」、相手の言葉の繰り返し、応答詞の使用など)が多用されている。これらが、先行話者にとっても、相手の発話権を脅かすつもりがないことを合図する手立てとなっていると考えられる。

#### 4-2-2 調整系

②の部分は、先行話者の発話権は維持されているが、トピックが部分的にでも異なっている場合である。次に例をあげる「確認」「訂正・情報追加」「関連質問」「合図」「独り言的表現」などの発話が重なるものがここに分類できた。先行発話に対して調整的な働きをするものが多いので、「調整系」と呼ぶ。

例10) テレビゲームのソフトについて {確認}

C: ドラゴンクエストがさ [ー  
→A: [ドラクエっていうのは任天堂だよな  
C: そうですね

例11) ファミコンの値段について {訂正・情報追加}

C: もうだいぶ下がってきて [るよね  
A: [1万5 [、6千円  
→B: [1万ちょいぐらいで買えますよね  
A: あ、そう そんなに高いんだ

例12) 2種類のデザートについて {関連質問}

N: もう1種類はね、何かねオレンジのゼリーみたいな [かんじ  
→T: [それもおいしいの?  
N: それもおもしろかったよ。だけど…

例13) キャンプで水浸しになった話について {合図}

K: その [ちょっと設定の仕方が甘かったんじゃないですか  
→S: [いや いや いや  
S: いやその前に伏線がありましてね…

例14) 修論について {独り言的表現}

A: 進んでないよ

B: えっ? 進[んでないの?]

→C: [修論の話なんかしたくないよう

B: ××表現? (Aのテーマの確認)

説明を加えると、「合図」は、トピックについて、何か一言あることを予測させるような発話が重なっているもので、話し出そうとして止めた時の数音などを含む。「独り言的表現」は、会話の流れに少し外れた小さ目の声の発話などで、間接的にトピックを牽制したり、トピックへ入るための援助を要請したりすると考えられる。この他「えっ?」などの聞き取り確認もここへ分類する。

4-2-3 独立系

③の部分は、先行発話の発話権が維持されていない(発話権が重ねた話者に移動している)と判断される場合の重なりである。先行発話から独立しているという意味で、独立系と呼ぶ。次のような重なりがある。

例15) 公開授業について {展開}

D: 千何、千何百人の関係者が集まってとかなんとか言ってたよ  
凄いなーと「思っ<sup>て</sup>て\*

→C: [いや あのね僕も授業見たんだけど…

例16) 夫婦喧嘩について {トピックの継続・戻し}

M: …なんかそれで腹が立つのよ

Y: そりゃそう「だよ

→M: [むこうは愚痴って思うから聞きたくないのよ…

例17) 漫画について {新トピック}

A: ただ年に2回しか出ないんですよ単行本が なんだったけな月刊漫画、  
モーニング、あモーニングとは違うな そ[の

→T: [あのこの前日吉でその漫画  
の講義を3回ほどしたんだけどさ、…

独立系に分類した重なりは、トピックの「展開」を行うものが主だが、その中で、先行発話に先立つ自分の発話の「継続・戻し」を行うものを区別して考えた。この他、「新トピック」「総括」(例9)などの発話がこの分類に入る。先行発話の中断が見られない場合でも、文頭が「いやあのね」「あのこの前」「だから」などの言葉で始まる発話は、発話権が移動したと判断した。また、先行話者ががともと発話権を握っていないと見られる場合もある(例16)。

4-3 分類IIによる重なりの分類の結果(出現率)

以上見てきた分類の枠組みに従って、データ中、12組の友人同士の雑談の割



り込み型の重なりを分類し、その出現率を調べた結果以下のものであった。

表1

	トピックが一致	方向などが異なる・トピックが一致しない
先行話者の発話権維持	① 調和系 54.9%	② 調整系 26.4%
先行話者の発話権移動	③ 独立系 18.7%	

この表から、まずわかるのは、日本人の友人同士の雑談の範囲内でいえば、先行研究で、「妨害」と解釈されるような発話権の脅かしが見られる独立系の重なりは、わずか18.7%しか生じていないということである。これに対して、発話権を脅かしていない重なりが、81.3%生じていることになる。「一人ずつ話す」という会話の原則を絶対のものとして日本語に当てはめれば、わずか18.7%の「妨害的」な重なりが、その5倍以上も生じているという誤った結果が導き出されることになる。「一人ずつ話す」という会話の原則が日本語にそのまま当てはまらないのは、日本語では、発話のやり取りの単位である「ターン」という概念と、「発話権」という概念が必ずしも一致していないからにはほかならない。重なりを分析する際に、ターンにとらわれずに、「発話権が維持されているのか、されていないのか」の線引きをすることは、日本語に限らず、他の言語を見る場合も必要なこととなると考えられる。「ターン」と「発話権」が英語においても必ずしも一致しないことは、Edelsky(1981)によっても指摘されている通りである。

さらに、この表からは、発話権を脅かしていない重なり81.3%のうち、全体の54.9%は、先行発話に対して、トピックの変更も全く行っていないことがわかる。トピックを変更していないということは、先行話者が提示しているトピックを、それを伝達する先行話者の態度も含めて、全面的に受け入れ、相手に協力していると考えられる。これらが、相手の発話権を脅かすことなく、54.9%という高い比率で生じているということは、ここに分類されるような発話は、日本語の友人同士の雑談では、もともと即座に行われることが期待されている、即ち、相手の発話途中に、行われる事自体に価値があるものではないかと、考えることが可能であると思われる。例えば、音の重なり自体が情報の共有を強調する機能を持つことなどが考えられる。次頁の図は、それぞれの枠の中にどんな発話が入るかをまとめたものだが、同意や理解を示す発話で、発話権を脅かしているものは、ほとんどないことが、この点を裏付けていると思われる。

また、一方、相手の発話権を維持しながら、トピックを部分的にでも変更し

ている調整系は、全体の26.4%を占める。これらは、発話権の維持という意味で先行話者を尊重しつつも、相手のトピックが自分の理解や興味から遠ざからないよう、早いタイミングで働きかけていることになる。先行話者への全面的な協力ではないが、会話の目的が相互理解にあるとすれば決して妨害ではない。

この分類の試みにあたり、友人同士の雑談をデータの中心としたのは、山田(1992)にも報告されているように、雑談が最も典型的な日常の会話のタイプであると考えられるからである。また、友人同士(同性同士)の会話は、対人関係の差が出にくいと考えたためである。したがって、日本語の日常会話の平均的な傾向がある程度反映されていると考える。次の図は、各系統に見られる重なる発話の出現比を示した。これらの結果を、他の種類の会話と比較することで、重なりについて、さらに、明らかにしていくことができると思われる。

図2 重ねた発話の分類

割合の軸:%

発話権	トピック	一致	一致しない
先行話者の 発話権 維持		①調和系 ○同意・共感(43) ○理解・承認(40) ○驚き・感心(7) ○ほめ(2) ○応答(9)	②調整系 ○確認(26) ○合図(17) ○証・補強(37) ○独り言表現(7) ○関連質問(11) ○聞き取り(0)
		③独立系 ○総括(10) ○継続・戻し(52) ○新トピック(11) ○展開(27) *発話の自転軸を軸対照	
先行話者の 発話権 移動			

この結果は、友人同士の雑談の範囲内のものなので、論争場面などではさらに、異なった種類の重なりが起る可能性がある。なお、この分類は割り込み型の重なりについて行っているが、終了見なし型に適用することもできる。重なるの全体像を見るには、終了見なし型についても分類を行うことは有効だと考える。

## 5. おわりに

日本語に生じる発話の重なるのデータをもとに、重なるの分類を試みた。重なるの解釈は文化によっても異なり、解釈の相違が、コミュニケーションを妨げている事態もあると考えられる(Tannen 1984)。日本語における重なりについて、種類や機能、またその用いられ方を明らかにしていくことは、外国人とのコミュニケーションを円滑に行っていく上でも、欠かせないと言えよう。今後は、ここに示した重なるの分類の枠組を用いて、日本語の重なりについての

分析をさらに進めていきたいと思う。そして、重なりという、会話に生ずる一つの現象を手掛かりに、日本語の会話形成におけるルールというべきものの解明に近付いていければと考える。

注

1. 杉戸(1987:83) の発話の定義をもとに修正を加えた。
2. 藤井・大塚(1994)では「自己選択」としたタイプの重なりである。なお、「継続」として分類した重なりは、本稿では「割り込み型」に含めることとした。

参考文献

1. Edelsky, C. 1981 "Who's got the floor?" *Language in Society*, 383-421
2. 藤井桂子・大塚純子1994「会話における発話の重なり—協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』6, 1-13 日本言語文化学会 お茶の水女子大学
3. 藤井桂子 1995 「日本語の会話における発話の重なり of 意義と特徴」お茶の水女子大学人文科学研究科日本語文化専攻修士論文
4. Goldberg, J. A. 1990 "Interrupting the discourse on interruptions" *Journal of Pragmatics* 14, 883-903
5. レヴィンソン 1990 『英語語用論』安井稔・奥田夏子訳 研究社
6. Makri-Tsilpakou, M. 1994 "Interruption revisited: Affiliative vs. Disaffiliative intervention" *Journal of Pragmatics* 21, 401-426
7. Sacks, H., Schegloff, E. A & Jefferson, G. 1974. "A Simplest systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" *Language* 50, 696-735
8. 杉戸清樹 1987 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸層—座談資料の分析—』68-106 国立国語研究所編 三省堂
9. Tannen, D. 1984 *Conversational style: Analyzing talk among friends* Norwood, N. J.: Ablex
10. 山崎敬一・好井裕明 1984 「会話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」『言語』7, 86-94 大修館
11. 山田あき子1992「母語話者が日常的に行っているコミュニケーション活動の実際」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』, 67-72
12. Zimmerman & West 1975 " Sex roles, interruptions and silences in conversation" Barrie Thorne and Nancy Henley(Eds.), *Language and Sex: Difference and Dominance* Rowley, Massachusetts: Newbury House, 105-129

資料

1. 会話データ

データ名	性別	職業等	年代	時間	会話のタイプ
会話F 1	女4	大学院生x4	20-30	6'35"	雑談
会話F 2	女4	大学院生x4	20-40	4'35"	雑談
会話F 3	女4	主婦x4	30-40	6'40"	雑談
会話F 4	女4	主婦x4	30-40	10'10"	雑談
会話F 5	女4	主婦x4	30	10'42"	雑談
会話F 6	女3	主婦x3	30	5'45"	雑談
会話F 7	女3	主婦x3	30	7'18"	雑談
会話F 8	女3	大学生x3	20	6'18"	雑談
会話M 1	男3	会社員x2, 教師x1	30-40	4'00"	雑談
会話M 2	男3	大学院生x3	20	7'33"	雑談
会話M 3	男3	大学生x3	20	7'26"	雑談
会話M 4	男4	大学院生x4	30, 50	6'37"	雑談

\*その他、相談顧問など4組の会話

友人同士の会話

2. 文字化の記号

- アルファベット : 話者  
 [ : 発話の重なり開始箇所  
 ? : 上昇イントネーション  
 → : 注目すべき発話

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科1年)